

西邨貞檢 大槻支彦訂 目下部三之介編 卷三

小學讀本

自明治二十年三月十六日
文部省檢定濟小學校教科用書 金港堂
至明治廿五年三月十五日

小學讀本三の卷

西邨貞檢 大槻支彦訂 目下部三之介編 卷三 菱潭書
松井昇書

○第一

普通の學科 學ぶ 修身 讀書

算術 習字 業に就く 學問 不

自由 兒童 其の歳

小學校は、普通の學科を學ぶ所なり、

小學讀本 卷之三

金港堂

2222

校學開

221 11-4

121 / 11-4

すことは甚だ難きものなり、

人も亦然り、幼少の時によき教へを受け
て心の基を固くすれば、良人となふ
ことを得べし、

然れども、幼少の時に怠りて、一え
守る所なく、成長の後に至りて俄に良
き人たらんと欲すとも、甚だ難きこと、
此乃大木の如くなるべし、

第八

今の氣候は春なるべし、

木々芽出て、花開きて、野も山も一面小
青色をたび多るがうちに、紅白うち交
りたる景色いと麗はし、

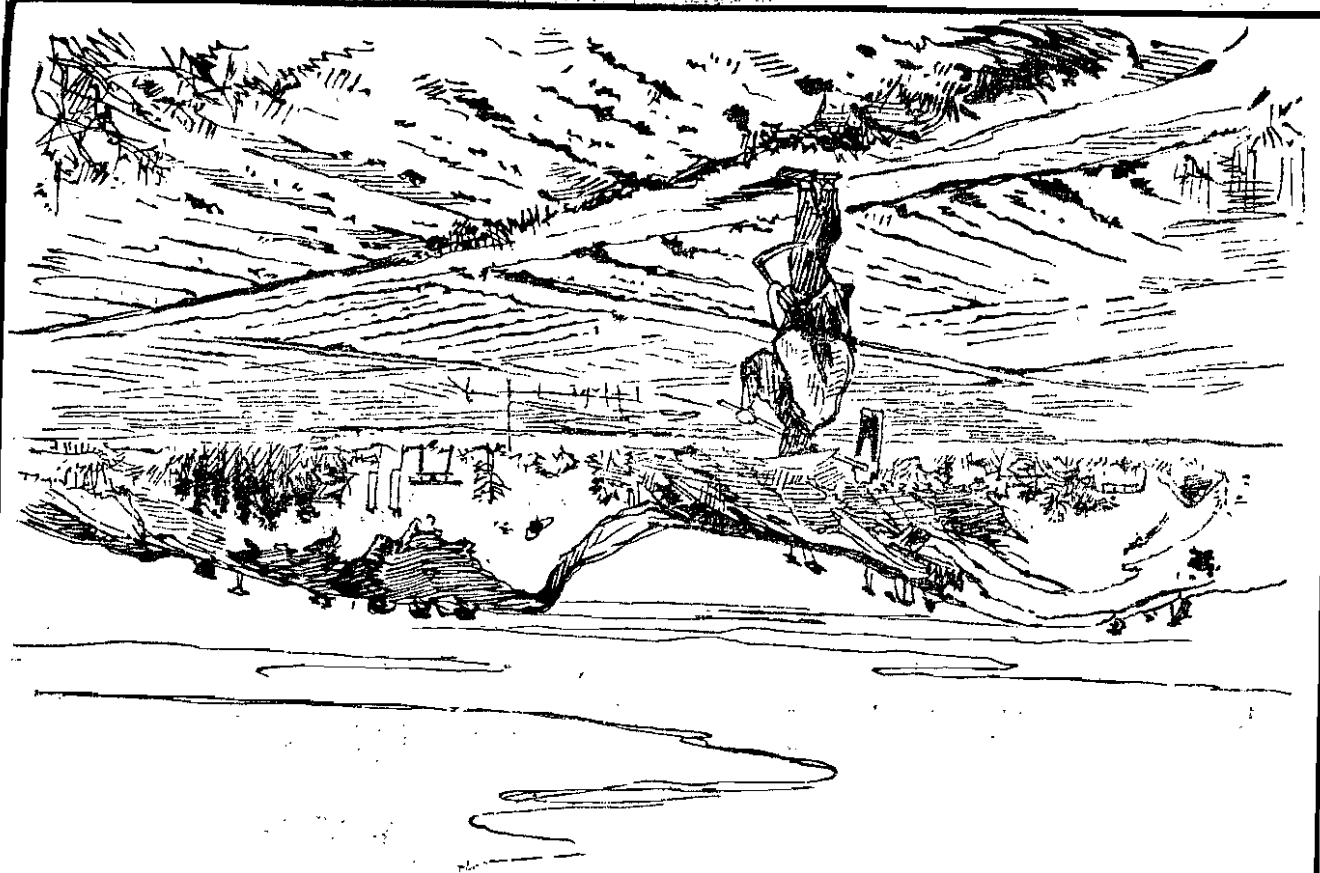
一人の農夫は、鋤と鎌とを携へて、畑に
小路に立てゑ、

彼れを畑を耕して、穀物及び野菜の種

を時かんとするなり、

すべて種は、雨後に時くをよろしとす、
又種の芽出でたるときは、あたりの雑
草を抜き取りて、肥料を施し、培養を怠
るべからず、

もし培養を怠るときは、たとへ良き種
を時きたると取りこれ乏しけれど、
其の甲斐なかるべし、



杉、松、檜等は、家を建つる良材にして、又種々の細工に用ひても、其の用少からず。

第十五

米、麥、粟、黍、稷を五穀といふ。

五穀は人の食物として、缺く可らざるものなり。

殊に米は我が國人の常食とするもの

なるを以て、大に之を貴ぶなり。

此の五穀は、田畑に作るなり。

其乃實の結ぶ所を穂といふ。

穂より實をこき落し、或は打ち木としたりを粃といふ。

粃を舂き、精けたる後、或は炊き、或は蒸し、或は煮て、食物とするなり。

穀物をば、些かの餘りものありとも決

して無益に棄つ可らず

粒々皆辛苦より出でたるは、汝等の能く知る所なるべし

第十六

夜の間に怖ろしき聲をなして、深林の中に叫ぶ鳥あり、其の形は、鳶に似て、眼は大まくして圓し、此の鳥の名を知るものありや、此の鳥をば、梟と云ふなり

梟は、眼甚だ大まくして、且つまろしと雖ども、晝は物を見ること能はず、夜に至れば物を見ること、猶ほ人の晝間に物を見るが如し、



七月二日。

中村二郎

再拜

渡邊太郎君

副申、今日午後より加藤三郎氏
も来宅の筈と付、直字宛にきて、
お言葉を述べた。

第二十一

晝長き時は夜短く、夜長き時は晝短し。

夏は晝長くして夜短く、冬は晝短くし
て夜長し、夜長き時は夜業をなすに宜
し。

夏と冬との時候に如何なる違ひある
か、夏は暑くして冬は寒し、寒き時は家
より出て業をなし、暑き時は外に出で
て業をなすべし。

夏は農作業の忙しき時なり、冬は農作業の

暇なる節あり、故に農夫は、冬の日には、
 休むことあれども、夏の日には絶えて
 休むことなし、今や農夫の田畑に出で、
 耨るもあり、耕すもありて、いと忙し
 き様あるを見れば、時節は必ず夏なる
 べし、

第二十二

もみち葉は、木枯しに吹き誘はれて



西邸 貞檢 目下 部三之介 編 卷五
大槻 文彦 訂

本讀小學

自明治二十年三月十六日
文部省檢定濟小學校教科用書 金港堂
至明治廿五年三月十五日

小學讀本五の卷

12 / 11-6

121	
1	
11-6	

西邸 貞檢 早部三之介 編 卷五
大槻 文彦 訂 柳源 古畫

第一

茲に畫けるは花園の雜草を抜き去る
圖なり

見よ一人の園丁は笠を被ふり腰を屈
めて切りに雜草を抜き取れり

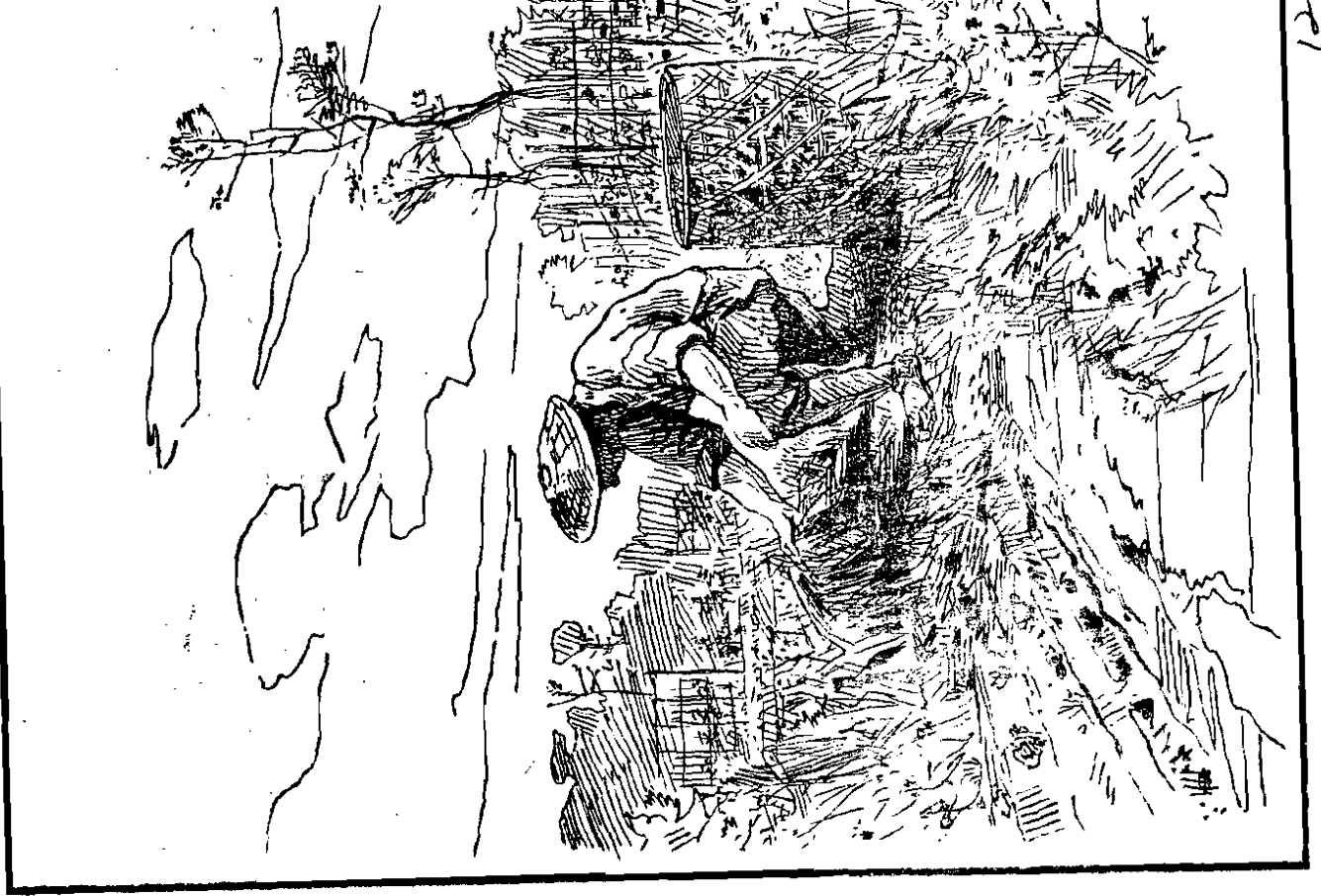
小學讀本 卷之五 金港堂

開學校

智印

2222
17

2-1
11-6



彼れが斯くの如く、雑草を拔き取る所
以は、他にあらす花草をして、益々繁茂せ
しめ、美しき花の數多く咲かんことを
欲すればなり。若し雑草をして、園中に
蔓らしめば、善き草は自ら枯れ盡くる
に至るべし。
人も、切まじきは惡しき心の生じて、良
ま心を害することあるは、猶ほ花園に

雑草の生すると同じく若し之をして増
 長せしむれば終には良からぬ人とな
 るべし、
 されば若し惡しき心の起ることもあ
 らば速に勉めて之を除くべし然らず
 ては學問藝術に達し品行端正にして
 世に益ある良き人となることも能はざ
 るなり、

第二

數人ノ少年ハ各肩ニ數本ノ釣竿ヲ擔
 ヒ手ニ一個ノ竹籠ヲ持チテ共ニ川ノ
 邊ニ赴ケリ、

此ノ日ハ學校ノ休暇ナレハ勤學ノ勞
 苦ヲ慰メシガ爲ニ魚釣リニトテ往キ
 タルナリ、

魚ノ川ニ生ズルモノニハ數多ノ種類

内田嘉一訂 日下部三之介編 卷六

小學讀本

東京

金港堂

小學讀本六の巻

習

西邸 貞 檢
内田嘉一 訂

日下部三之介 編

松井甲太郎 書
後藤金彌 畫

第一

二人の兒童雨中に傘を同トくして來れり、
彼等は學校の歸り途なるべし、各本と石盤
とを持てり、彼等は兄弟ならん、孰れも喜色
面小現はれて、いと睦トけなり、彼等は學校
の課業を勉むることを何よりの樂しみと

校學開

2222
17

2
11-7

12
1
11-7

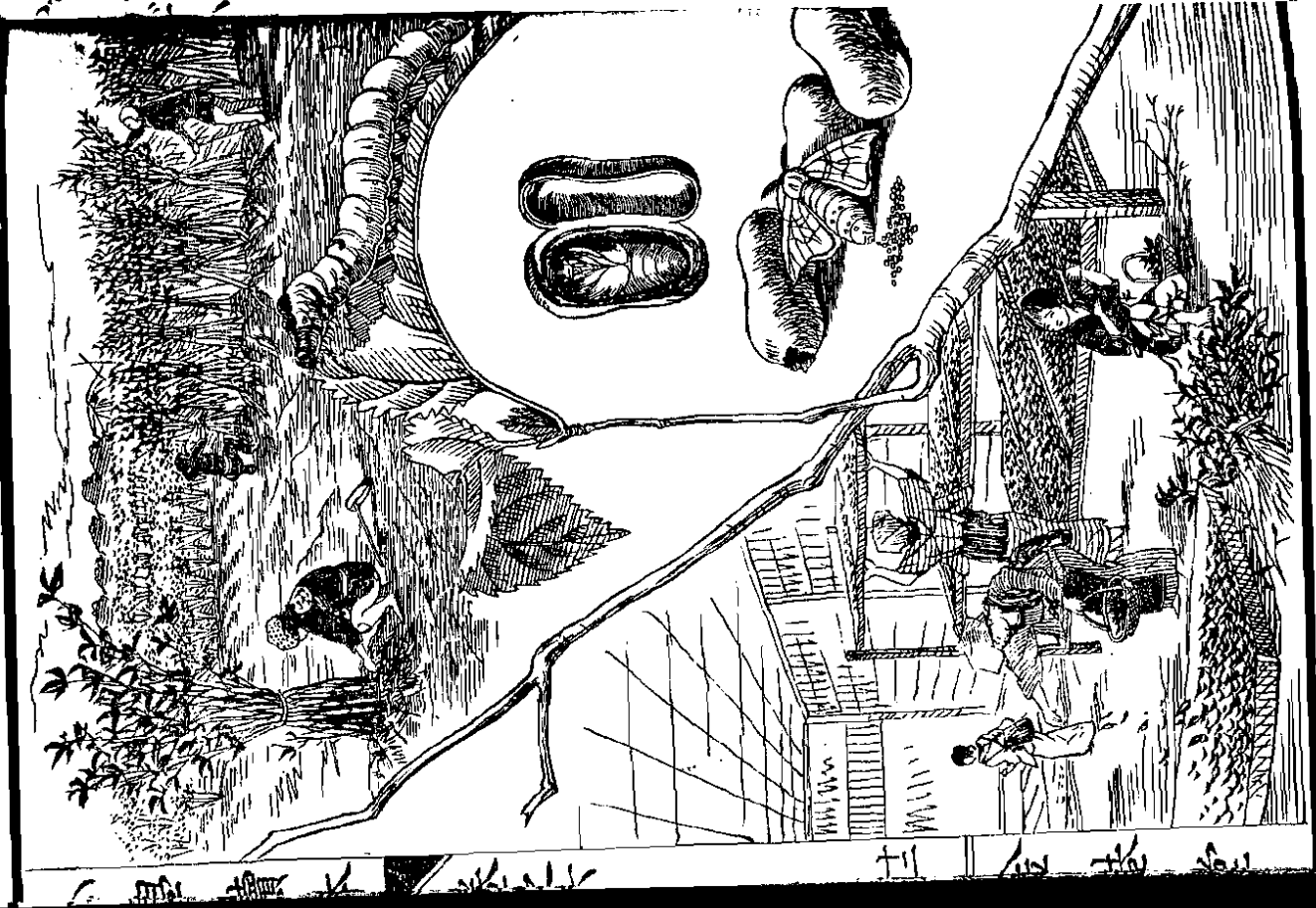
第九

人の家に往きて待たせられたるばかりに
 憂きはなし我が心憂きことを思はぬ人を
 も待たせざる様にせよ英王ウイルム第
 四ある日一人の大臣を召しければ大臣は
 直ちに参内せしにひと間の中に數時間待
 たしめ漸くにして面會せられてさて大臣
 に向ひかねてより汝は人を待たすること
 何故ぞ思はぬ待たせ置き常れば我が家に
 往きて待たせられたる者どもの心を察せ
 しめたるなりといはれけりとて此の大臣
 は定めて自ら感ずるところありしならん
 すべて我がかたりれたるつる人の心地よ
 きやうにむろるがあるもの心がまへな
 るべきをなど徒らに待たすることやあら
 んよく心にすべき事にこそ

第十

桑は蠶の食料に、必要の植物なり、故に養蠶家は皆務めて之を培養せり、

桑の種類はさまざまあり、又培養の仕方によりて、發育に損得の差ひあり、故に養蠶家はよく其の種類の良いものを選び、十分に肥料を與へて種々に手を盡し、少しも怠ることなく、若し良からぬ桑を蠶に與ふるときは、或は病を來たし、或は繭を結ぶこと全



桑の養育と蠶の飼育

蠶には、春蠶、夏蠶、秋蠶等の種類ありて、發生の時節各同からず、又各地の氣候の寒暖によりて、遲速の差ひ少一づ、あれども、大方は發生の日より三四旬を経て繭を結ぶものなり、之を飼ふものは、深く心を用ゐて、發生の初めは、桑の嫩芽を細かに截り、時間を定めて、之を與へ、漸く長ずるに隨ひて、其の食量を増し、或は寒暖を測り、或は風雨を考ふる等、晝夜甚だ忙はし、既にして繭を結ば

んとする期に至れば、別に棚を設け、巢を作りて、其の中に入る、斯くて三四日を過ぎて、全く繭を造り了れば、一々之を拾ひ取りて、絲に紡ぎて織物とするなり、外國にも養蠶を業とするものありと雖も、我が邦の生絲は、其の名最も高く、

蠶を養ふことは容易き業にあらずれば、絹の服など着るときは、別けて苦勞を思ひやり、ゆめ／＼粗略にすべからず、

ふづきことよとて常に衡にて食物を量りて食へけり或日一人の僧來りてこのさまを見て、こは禪師の老耄せる徴なりと笑ひければ禪師答へて曰く否とよ世に無用のものならんには死すとも惜むづきにあらざれどさもなまほとのものならんには一日生くれば一日の益あり余が性命を大切にするはこれがためなりと

第十二



人の食物となるものは動物植物及び礦物等なり、動物とは鳥獸魚等なり、植物とは穀物野菜菓物等なり、礦物とは食鹽水等なり、水は人體に最も要用のものなり、人體のたよる三分の二は水よ

り成れり、人若し數日の間水を用ゐざると
きは、いたく勞きて苦痛を覺ゆべし、食物に
は大抵水分を含まざるものなり、食鹽も亦
人體には一日も缺くべからざるものなり、
牛乳肉類穀物雞卵等には蛋白質といふも
のを含めり、中にも雞卵は其の清淨なるも
のを最も多く含めり、
獸肉の類には鐵緯質といふものを含み、小
麥其の他の穀物の中には植膠といふもの

を含み、牛乳には乳酪質といふものを含め
り、

この蛋白質鐵緯質植膠乳酪質を總稱して、
含窒物といふ、これは人體の組織に最も大
切なるものゆゑ、或は滋養食物ともいへり、
肉類牛乳等には又多く脂油を含めり、脂油
は、體温を生ずる本なれば、寒地の人、多く
脂油に富める動物を食料とす、冬の日、多く
肉食を要するも、此の理なり、砂糖は甘蔗

葡萄、甜菜等の植物ふ多く、又蜂蜜牛乳等にも含めり、

澱粉は米、小麥、裸麥、其の他の穀物中に在り、
護謨も亦植物より生ず、この砂糖、澱粉、護謨を總稱して糖類といふ、

以上を熟れも身體の成分に要用のものなれども、中にも含窒物を第一の滋養品とす、

第十三

豕は食用獸の一種にして何れの國にても

飼はざる處なし、元來此の獸は如何なる土地をも擇ぶことなし、故に多くは園の一隅などふ矮き小屋を造りて其の中に飼養せり、

見よ此の豕は小屋の中に在りて頭を半ば土中に埋めたり、これは窪み處にある食物を食はんがためなるべし、如何に粗にして汚れたる小屋ならずや、豕は多く斯かる小屋に棲むが故に世人は汚れたる家一指し

西邸 貞檢 目下部三之介編 卷七
 内田嘉二訂

小學讀本

東京 金港堂

小學讀本七の巻

西邸 貞檢 目下部三之介編 松井甲太郎書
 内田嘉二訂 後藤金彌畫

第一

(一) 皇御國のものゝふは如何なることを
 な勉むべき唯身にもてる真心を君と
 親とに盡すまで

(二) 皇御國のをのこしは撓まず折れぬこ
 ろもて世のなりはびを勉めなし國

2222
 11-8

校學

智

印

121
 1
 11-8

2222
 11-8

小學讀本 卷七 金港堂

と民とをさますべし、

世のなりはひに様々あるよしは、卷の三の
第十八にいつり、汝等は農業工業及び商業
の孰れを好むか、
人になりはひなければ、自ら生活すること
能はず、自ら生活すること能はず、如何に
して我が父母に事へんや、又如何にして我
が 天皇陛下に事へ奉らんや、父母に事へ
ざるものを不孝の子といひ、 天皇陛下に

事へ奉らざるものを不忠の臣といふ、不孝
不忠なるものは、人にして人にあらざるな
り、

あゝ、汝等よ、前の歌を能く繰り返せ、能く其
の心に従ひ、各其のなりはひを勉めて、不孝
不忠のものとなる勿れ、

第二

今より凡そ五百年前に楠正行といふ忠孝
無類の人ありき、其の父をば正成といひて、

○第十七

路先 突き 探り 盲目 水溜
陥らん 按摩 琴 善くす 暇

彼れは何故に杖にて、其の路先を突き
探りつゝ行くか、

彼れは、盲目なれば、其の路先に石又は、
水溜などありて之より跌き或は陥らん
ことを恐れて用心するなり、

彼れは、按摩を業とし又琴のしらべを、
善くするを以て暇ある時は、琴をしら
べて自ら樂とす、

○第十八

差別 農 工 商 耕 耘
穀物 野菜 家屋 器具 橋
船 布帛 製作 品物 賈賈
志す 道 究む 進む

人の業には種々の差別あれども其の重もなるものを舉ぐれば農工商の三つに分かる

農業とは田畑を耕し耘りて穀物野菜等を作ることをいひ工業とは家屋器具橋船布帛等を製作することをいひ商業とは農工の作りたる品物を賣買することはいふなり

人々自らその志す所に従ひて其の業を勵み其の道を究むべし徒らに古きを守りて進むことを知らざるは愚なりといふべし

○第十九

掃除 穢き 珍らしき 色 失
ふ 等し 趣 殊に 鬱 齊れ
快き 覺ゆ

西邨貞檢
大槐文彦訂

目下部三之介編

卷四

小學讀本

自明治二十年三月十六日

文部省檢定濟小學校教科用書

金港堂

至明治廿五年三月十五日

小學讀本四の卷

12 / 11-5

12 /
/
11-5

開學校

智

印

西邨貞檢
大槐文彦訂

目下部三之介編

卷菱潭書
柳源吉書

第一

見よ蒸氣車の馳するを見よ

十餘の列車を列ねて飛ぶが如くに馳せ行けり

2222
1/7
5

K/A
2/1
11-5

小學讀本

金港堂